
慈 恵



平成29年 No.60

秋



宗教法人 慈 恵 院 付属 多摩犬猫霊園

鑑賞



葡萄自画賛

山花水鳥皆知己

天啓

葡萄^{ぶどう}の画は多いが、こんなたつぷりしたものはめずらしい。

蔓^{つる}が活きて水々しく、葉が色づいて軽妙、仙味さえかもし出す。賛もまた清^{せい}勁^{けい}。

これこそ八十歳過ぎの、最もその本領の発揮された一点、と言えよう。

「禅画報」より

横山天啓

書道の本源を求めて、八十余年の生涯を書と禅に捧げた横山天啓翁（雪堂、昭和四十一年八十四歳で死去）は、書における墨気と境界を重ね、筆禅道を提唱、実践した。世に媚びることなく清貧の中で道を求めた翁の姿は「書仙」の趣があった。

太鼓の音を描く

ある者が仙厓にいった。

「詩を作る時には太鼓の音は鑿々などと書きます。和尚はたいへん絵がお上手ですが、いくら上手でも太鼓の音は描けますまいな」

すると仙厓は何くわぬ顔で、

「なに、たやすいことさ。どれ、見ていなされ」

というや、すらすらと筆を走らせて、一人の侍が長い槍を空に向けて突き上げているところを描いた。何やら狐につままれた思いで見ていた男は、

「これは何です。太鼓の音ではありませんよ」

というと、和尚は、

「天突く、天突くじゃ」

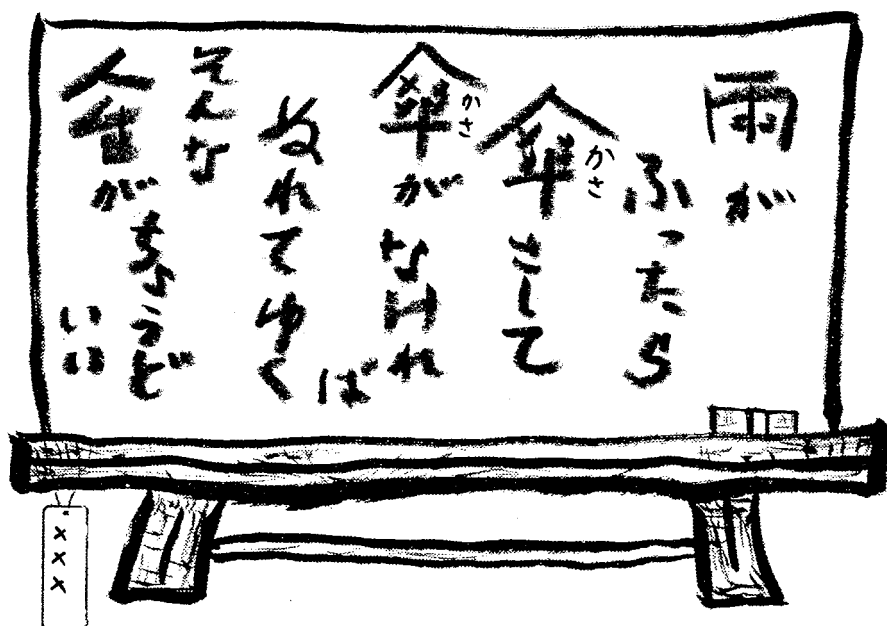
と呵々大笑した。男も思わず破顔一笑したのである。

「禅門逸話集成」より

仙厓義梵 (二七五〇～一八三七)

臨済宗。美濃の生まれ。月船禅慧に参じ、のち聖福寺の盤谷に師事した。その飄逸な絵でよく知られている。

掲示板





菜の花のころ

東久留米市

鶴岡 由利子

菜の花が美しく咲いていたところ、一頭のラブラドルレトリバーの仔犬が私達の家族になりました。菜の花のころだったので、名前は「菜々」。

一緒に過ごした十四年間、人間のつごうで菜々は留守番が多く、寂しい思いをさせてしまったかもしれません。亡くなって一年が過ぎましたが、たくさんの「ありがとう」を伝えます。

○想い出をありがとう

北海道の礼文島から、

沖縄の石垣島まで、日本中を一緒に旅したね。石垣では、サンゴ礁の海で泳いだね。キャンプ、スキーも行ったね。川遊び、お花見……いつも家族で出かけたね。旅行の支度をしていると、すぐ気がついて、いつの間にか車に乗って待っていてくれたね。思い出は、日本中に残っているよ。

○友達を作ってくれてありがとう

人間が大好き。散歩で誰かに会うと、近づいて行って挨拶したね。近所のお友達もたくさんできました。菜々が繋いでくれたご縁です。

○生命の大切さをありがとう

食欲もあり元気で、亡くなる前の日までふつうに散歩していました。でも一週間ほど前から、急に呼吸が荒くなることがあり、吸入するための七回の全身麻酔に耐え、さめるとすぐに尻尾を振ってくれました。一生懸命に生きる姿を見せてくれてありがとう。介護する間もなく、心残りですが……。

菜の花のころ家族になり、桜の満開のころ別れた菜々。また今年もこの季節がめぐってきました。・十四年 いつも一緒に歩いたね 武蔵野の森 菜の花の径

・その尻尾 何回振ってくれたかな 卯月の空に そつと手を振る

もう一つの家族

三鷹市 藤井 隆子

「ガビ……そこに居たの」朝食後ガビ（生後十五年めす猫）が、いつもと同じライティングデスクの上にちんまりと座つて、外を見ている。彼女の視線の先は、道一つへだてた、となりの建物の窓である。

私の問いかけに、初めて見せた淋し気な目で、振り返った。

向かい側の窓には、カーテンもなく人の気配が

しない。二、三日前に引
つ越して行った。

彼女は、じつとその窓
を見つめて、

「くう…」

と一声小さく鳴いた。

ガビの淋しい声だ。

Kさん宅では、ガビが
外を見ていると、母娘で
手を振り、笑顔いっぱい
を送ってくれていた。御
一家はガビにとり、もう
一つの家族でもあったよ
うだ。

「淋しいけど、がまんし
てね」

と、話しかけつつ、私
の心にも一抹の淋しさが、
ふつと沸いて来る。

飼育禁止の団地住いで
あったものの、生まれた
日に捨てられていた、ガ
ビとその兄妹五匹を、鳴

き声を無視することは出
来なかった。

彼等には死は目前であ
った。スポイトでミルク
を飲ませて、三日、四日
の後に次々と死んで行き、
一番頼りなげなガビが、
目をあき小さな足で立ち
上がった。私が出した手
のひらにのり、必死に鳴
いていた。「助けて」と。
あの日から十年以上が
すぎ、立派な大人に育っ
た。

お隣も、そんなガビの
存在を認め、窓ガラスか
ら、暖かで優しいサイン
を送ってくれた母娘。も
うそこにはいないのに、
カーテンを引かなくとも、
ならわしのように、同じ
場所で、じつと向かいを
見つめていた。

「お引越したから…
がまんしてね」

と、説得している日々
だが、彼女は一寸淋しい
目となっている。

二人でゆつくりと、慣
れなくてはと改めて思っ
ている。

10匹の犬

墨田区 稲田 恭子(72)

私が小学一年生の時社会
見学である工場に行つて
の帰りなんと一匹の犬が
ついてくるのではないか、
ついに家でかうことにな
り、なまえをベルとつけ
私が高校生の頃亡くなり
ました。それから五年が
過ぎた頃に又色メガネを

かけた犬殺しに会いそこ
にはオリに入れられた五
匹の犬たちが何と涙を流
しているのです。私はす
ごくショックでとつさに
逃がしてしまおうかと思
い手をかけたが実行する
までは勇気がなく実行出
来ず、時々夢にみえます。

数十年が過ぎてから八
匹たて続けにかいました。
それぞれに想い出である。
今も竹生苑や、慈恵院に
行くとび骨つぼをだいて
語りかけている。とうと
う十四目の犬に出合いま
した。皆すて犬です。去
年の十二月六才のラック
に私は七十二才。残して
はならないと強く思いま
した。